
アンラッキーチョイス

秋月あきら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

アンラッキーチョイス

【コード】

N6807D

【作者名】

秋月あきら

【あらすじ】

世界一ツイてる男が広げるアクション虚編！

オレは人からこう呼ばれている　世界一ツイてる男と。
独身バツイチ、子供は別れたカミさんのところにいる。

そして、しがない探偵………を指そうと思ってるさ。
るだ。

まだ探偵になると決まったわけじゃない。
ただちよつとトラブって、警官バツチと銃を課長に預けてるだけ
さ。

人は休職だというが、オレは骨休めの休暇だと思っている。
さっそく昨日からマンションのポストに、片っ端から探偵社の広
告を突っ込んでおいた。

まだ誰からも依頼はないが、そろそろ来そうな予感がする。
なんだって、オレは世界一ツイてる男だからさ。
ドンドンドン！

お、玄関を叩く音だ。ほらな、依頼人が来たぜ。

ドアを開けてやると、鼻息の荒いオバサンが飛び込んできた。

「あんたかい！　こんな広告勝手にポストに入れたのは！！」

「そ、それは……」

「困るんだよね、こういうことしてもらっちゃ。今度やったら警察
に言うからね！」

ボタン！！

ドアを閉めて言いたいことだけ言って帰りやがった。

ま、こんなこともあるさ。

ドンドンドン！

また部屋のドアを叩く音だ。

今度こそ依頼人だ。

さっそくドアを開けてやった。

「探偵のご依頼ですか？」

化粧の濃い中年の女が飛び込んできた。

「ウチのシャルロットちゃん居なくなったのよ!! 早く、早く見つけてちょうだい!」

頭に響くキーキー声だ。

「で、奥さん?」

「まだ結婚してないわよ失礼ね!」

「え? では、シャルロットというのは?」

「わたしの子よ!」

なるほど、シングルマザーというやつか。

「シャルロットの写真か何かありますか?」

「ええ、ここに」

女がオレに渡した写真は……彼女自身が写っていた。

「いや……あなたの写真じゃなくて」

「なに言ってるのよ、ここにちゃ〜んと写っているでしょ!」

女が指さしたのは一緒に写っていたデブ猫。

「まさか……シャルロットというのは……この猫ですか?」

「そうよ、早く探してちょうだい!」

オレは動じない。

なぜならオレはハードボイルドだからさ。

こういう時は一服して気持ちを切り替えるに限る。

オレはポケットに入れていた煙草を……煙草が……ない?

そうか、煙草は……禁煙中なのだ。決して金がなくて買えないわけじゃないからな。

まあいい、煙草のためにも……じゃなかった、猫の命のためにも依頼を引き受けよう。

なぜならオレは動物愛護主義だからさ。

依頼人の女が眉間にシワを寄せて鼻をクンクンしている。

「なんだか臭わない?」

「金はなくても風呂は毎日入っているが?」

「そうじゃなくて、焦げ臭くない?」

「……アアアアアツツ!!」
チキン!

そつだチキンだ!
チキンをオーブンに入れっぱなしだった!!
急いでオーブンを開けると丸焦げのチキンが……。

チキンは食えなくなっちゃったが、火事にならずに済んだ。
やっぱりオレはツイている。

まさかオーブンが爆発して爆死なんてゴメンだからな。

「ちよつとウチのシャルロットちゃんはどうなってるの!!」

女が喚いている。すっかり依頼人のことを忘れていた。

ドンドンドン!

なんだ、新しい依頼人か?

オレは女を押しつけてドアを開けた。

「宅配便です、サインお願いしまーす!」

なんだ宅配便か。

さつそく荷物を受け取ると、オレは包みを開けようとした
横
で女が喚く。

「そんなの後にしてよ! ウチのシャルロットちゃんを探してちよ
うだい!」

「まあまあ奥さん、話はあとで聞きますから」

「だから結婚してないわよっ!」

そんな女の声も上の空で、オレはさつそく包みを開けた。

ダンボールの中には梱包材で包まれた木箱と手紙。

さつそく手紙を読み上げた。

「なにに、『花火は好きか?』だとさ」

花火よりも食い物のほうがよかったが、プレゼントだ、こころよ
く受け取るうじゃないか。

オレは木箱を開けた……とたん青ざめた。

「爆弾!?!」

横にいた女も叫ぶ。

「ば、ばばばばばばくだん!!」

よくテレビドラマで見たことのある時限爆弾だ。刑事だからって、こんなもん見るなんて一生に1度あるかないかだ。

こんなレアな物を見れるなんてオレってやっぱりツイてるな。

アゴをガクガクさせながら女が時限爆弾に表示されている数字を指さした。

「これって、カウントダウンしてるんじゃないの!!」

「へっ!?!」

残り42秒……と言っている間にも数字が減っていく。

「奥さん、慌てなくても平気だ。解除方法ならテレビで見たことがある」

「あんだと心中なんてイヤよーッ!!」

女はさっさと逃げてしまった。

ふっ、女に逃げられるのは慣れっこさ。

なぜならオレは妻にも逃げられた男だからさ。

さっそく爆弾を解除しよう。

こつこつのは赤か青を切ればいいに決まってる。

……線がいつぱいあるッ!?

赤青黄色緑、白や黒に、ピンクまであるぞ。

7本……ラッキーセブンじゃないか、ツイてるな。

7分の1なんて宝くじを当てるより簡単だ。

さてと、ハサミ、ハサミが……ない?

慌てるな、台所にチキンをさばいたナイフがあるはずだ。

爆弾を抱えて台所に走った。

ほらな、台所にナイフがあつたら?

すぐに切る物を見つげるなんて、オレがツイてる証さ。

よゝし、切るぞ。

どの色にするか悩むところだ。

赤だな、赤がいい。

赤はオレのラッキーカラーで、今日も赤色のシャツを着ているくらいだ。

ナイフを動線に突き付けて、せいの！
ブチッ！

……と、止った！？

カウントダウンは7で止っている。

やっぱりオレはツイ……あれ、カウントダウンが再びはじまった！？

6、5、4

大丈夫、逃げ足だけは自信がある。

オレは急いで窓から飛び降りた。

「……あっ、ここってビルの4階だ」
ドーン……！！

T H E E N D

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6807d/>

アンラッキーチョイス

2009年3月24日11時20分発行